

「総合」のルネッサンス 学びの実践共同体づくりへ

中間真一

HRI社会研究部 主任研究員

子どもたちの学びの場が混乱はじめている。もはや、試行錯誤のときではない。他人任せのときでもない。原点に戻れば、「ゆとり」や「総合」の学びの価値、課題が見えてくる。子どもたちが、未来へと育つ力と可能性を開かれた学びの場で開花し、結果するのだから。



てら子屋
VIEW



行きつ戻りつの「まだらの教育」

正月明けの新聞で「まだらの教育」というコラムの題名が目にとまった。戦後日本の教育政策は、かなり短い周期の振り子のごとく、行ったり来たりを繰り返して、その都度、子どもたちは翻弄されるが適応し、結果として日本は、質の違う教育を受けてきた人々が、まだら模様のように世代を成す社会となってしまう

た。本格的な高齢社会の到来を控えないで、思いつきでこのころ変更するのではなく、じっくりと教育を考えなくてはいけないという内容だった。

もともとだと感じつつ、この間にも教育を受け続けている子どもたちの親としては、安易な「試行錯誤」はもちろんのこと、「じっくり」考えてもいられない教育への危機感を強くした。

しかし、年明け早々から、再び教育の

あり方は大きな揺り戻しを始める気配がうかがわれる。学力低下の原因として、「ゆとり教育」「総合的な学習」への批判が、にわかを高まっているからだ。

「総合」が廃れていった理由は？

この「総合」という言葉自体も、流行り廃りの激しい言葉だ。総合生活産業、総合開発事業、総合研究所、総合学部など、日本経済にゆとりがあった頃に次々に社会の中に生まれ、バブル経済崩壊後は、「総合」の時代は終わったなどといわれている。

もちろん、「総合」の価値を生み出し続けているところもある。それでは、廃れていった多くの「総合」は、何がまずかったのか。産業界を例に分析すれば、「寄せ集めの散らかしっぱなし」の総合は、当然のごとく脆かった。寄せ集めたもの同士の相互作用から新たな価値を得られなかったどころか、せっかく集めた一つの要素まで腐らせて、システム全体が破綻してしまった事例も少なくない。おいしいご馳走をたらふくいただいたまま、運動などで消化を助け、血肉にすることを怠り、体調を崩してしまうようなものだ。

このように、「総合」とは、単に個々

別々のものを集めてくるだけでは価値を生むどころか、損失へのほころびとなる。集めてきたものを合わせて価値にしないではならない。しかし、集めてくるだけで満足してしまいがちなのが現実のようだ。

百年以上の歴史がある総合学習

ここで少し、日本の総合学習の歴史に触れる。近代産業社会の教育は、産業のパラダイムシフトを契機として、時間の遅れを伴いつつ変化してきた。だから、バブル景気の産業界の総合ブームに遅れること約10年、総合学習の取り組みも2002年度から正式に始まったばかりだ。

しかし、日本の公教育における総合学習の発想は、最近の欧米の学習スタイルに追従したわけではない。すでに、1世紀以上の歴史があるのだ。明治30年代に一斉授業への批判から主張されはじめ、豊かな大正時代の中で、総合学習の取り組みは広がっている。その様子が、稲垣忠彦氏の『総合学習を創る』（岩波書店）に詳細に記され、総合学習の先駆的事例として紹介されている。1896年（明治29年）、高等師範学校附属小学校訓導（教諭）の樋口勘次郎氏による、小学2年生を対象とした『飛鳥山遠足』（東京の上





野・池の端から王子にかけての遠足)の記述など、とても興味深い。

大正から昭和初期の総合学習

遠足に先立つた事前の博物館見学により、子どもたちはそれぞれ自主的に課題設定をして、学びへの導入部分が築かれる。遠足前日には、先生自らが予定コースを歩き、子どもたちの課題への対応の構想を直前の実地で立案していく。すると、効果的でさまざまな教材利用が導き出される。たまたま工事中の坑も教材の対象として、有機的に編み上げられていく。その成果は、遠足の翌日に子どもたちが書いた作文で明らかとなる。そして、先生はそれらの見聞の結果を、動物学、植物学、農業、商業、工業、人類学、民俗学などの学問領域に結びつけて指導の方向を定めていく。もちろん、遠足であるから、子どもたちの作文には、山からころころころがって下りるのが楽しかったことや、汽車が来たのに線路を越えて叱られたなど、とても楽しんでいる様子が、ありありと伝わってくる。

このような授業、「総合学習」が、100年以上前に展開されていたのである。現在実施してもまったく問題ないどころか、このくらい徹底して入念に実施しては、すでに言い尽くされていたのだ。最先端の教育論であっても、ほぼこれらの焼き直しに過ぎないように思えてしまう。

しかし、このような1世紀の歴史を持ち、未来への可能性を育む学びのあり方としての総合学習は、いまだ開花せず、結果まで至らぬままに、批判を受け、せつかくの芽を摘まれようとしている。

「学力低下」に対する危機感

では、現在湧き起こっている総合学習への批判の根底にある意識、直接のきっかけは何だったのか。それは、子どもたちの「学力低下」に対する危機感である。

国家、経済産業界、教育界、そして家庭の親たちも、ただでさえ先行き不透明で不確実な社会の中で、教育こそ確固たる礎であり資産となるという考え方は一致している。今年1月には、経団連まで「これからの教育の方向性に関する提言」を発表し、「現在の教育は社会の期待に心えていない」として処方箋を提示した。トヨタやJRR東海、中部電力という企業が創設する海陽中等教育学校も、いよいよ着工された。未来を担う子どもたちのことを、だれもが心配しているという点では一致しているのだ。

こそ、総合の価値が生まれるのだろうかと感じられた。

この事例の後にも、大正期から昭和初期にかけて、日本においても総合学習の実践展開がかなり進んでいた事実があったことに驚いた。そして、そこで主張されている教育への考え方は、現在、最も必要とされているような考えであり、実践であるように思えるものばかりであった。

たとえば、大正6年(1917年)に創設された成城小学校(東京)の創設趣意書には、教育の目標として、「個性尊重の教育」、「自然と親しむ教育」、「心身の教育」、「科学的研究を基礎とする教育」の4つが掲げられ、定型化された学校教育の改革を求めて出発している。また、ほぼ同時期に展開された、奈良女高師附属小学校の取り組みの紹介では、「学習は環境と交渉して、疑うて解くものであり、学習形態としては、子どもが個別に学ぶ独自学習と、集団で学ぶ相互学習から成っている」という記述があった。

このような日本の総合学習創設期の理念と実践は、まさに日本の未来にとって、必要不可欠となる教育ではなからうか。HRIが、これからの学びの場のあり方を研究するための「てら子屋」を実践するにあたって思い描いていたこと

しかし、時代の変化のスピードに対して、総合学習では教育の成果の即効性に劣るとして、我慢しきれなくなってしまう。確かに、小中学校の総合学習の質は、きわめてバラツキが大きいのは事実だ。だから、スタンダードが明らかでない。偏差値や難関大学合格者数という、目標と成果のわかりやすく即効性の高い知識詰め込み型に向かってしまっているように思えてならない。

トップに躍り出たフィンランド

さらに、昨年末に発表されたOECDによる2003年の生徒の学習到達度調査(PISA)の結果、41カ国・地域中、日本がトップの座から転落したという結果が、火種を一気に大きな炎に変えてしまったようだ。そこで、このPISA調査のねらいと、今回総合トップとなったフィンランドの教育について、再確認をおきたい。

今年1月、OECD教育局のアンドレア・シユライヒャー指標分析課長の講演を聴く機会を得た。彼は、講演の冒頭で、「知識を基盤とする社会」「こそ明日の世界であるとした上で、PISAの目的が、明日の世界に対する生徒たちの学習準備度合いを評価し、教育の改善に資す





上で紹介されていたほどだ。
日本では、学力低下に危機感を抱き、再びトップを奪還すべく、総合学習やゆとり教育の見直しによる教育改革に取り組みつつしている。一方、フィンランドは、総合学習によって学力トップの座を獲得している。まったく逆のアプローチだ。もちろん、両国間には背景となるさまざまな違いがある。人口規模にしても、日本の約4%にあたる520万人程度に過ぎない。しかし、正反対方向への教育のかじ取りは、慎重に考える必要があるはずだ。

「学び」から「育ち」へ

ここで議論を整理しておきたい。PISAの趣旨である、未来志向の学力評価の考え方は正しい。だから、知識を現実の問題解決にあてはめて活用できる力が必要である。現実とは、子どもたちの日常生活である。生活と学習が相互作用を伴って理解を促す学習とは、総合学習の趣旨にあてはまる。総合学習は学び手一人ひとり個別の日常に発する。だから、学習プロセスもさまざまとなる。そのような学びの場を支える教師には、高い資質と志が求められる。しかし、一人の教師が、すべての専門性をカバーするのは

不可能だ。自ずとクラスや学校の中では完結できない学びが必要となる。学びの場の拡張が必要となる。
こうなると、もはや「学び」の問題としてとらえるよりも、「育ち」の問題としてとらえたほうが良いかもしれない。そうすると、子どもたちは学校や教室という時空間、価値観の制約から解かれる。そして、自らの生活から問題や関心を見いだし、それらを解決するために知識を獲得する。一方、教師や学校は、それらの知識獲得を支援し、学問領域との関係を助言するという新たな役割を担う。すると、学び手たちは再び学校や教師のもとに集まり、さらに学びを楽しもうと、共に歩みを進める。

このような「育ち方」が適当な年齢層の問題もある。私見となるが、小学校高学年から中学校の年代こそ、最も適しているのではないかと考える。育ちの素地ができれば、さらに上の高校や大学では、専門性を高めることに注力すればよい。ここでは、すでに彼らの中に自ら知識を編み上げ、現実と関連させて総合化して学ぶ力がついているはずだからだ。

こんなことは、傑出した人物のもとで、寺子屋や私塾としてはあり得るかもしれないが、日本という規模の公教育制度としてはあり得ない、教育のユートピアに

過ぎない、と批判を受けるかもしれない。しかし、一つの自律的な学びの姿であり、生きることに連動した未来志向の、めざすべき学びといえないだろうか。やはり、人間が社会とともに自律的に生きることで基本的となる教育の場面には、真の「総合」が欠かせないように思われてならない。「総合」のルネッサンスが必要だ。

学校を開く

現在、なかなか「総合」がうまく機能しない原因の一つには、「開く」ということに躊躇している学校という制度や、学校の先生たちがあるのではないかと感じる。彼らは子どもたちに教授することの専門家であり、優れた能力を持っていることは間違いない。しかし、自らの授業は自らの中で完結するというプロ意識の一面が、総合化を支援するという役割を邪魔していないだろうか。学校という制度も同様だ。開くための力が必要だ。

すばらしい学びの素材を活かし、おいしさを引き出してくれる「学びの料理人」として、育てるプロとして、腕を振るえるような教師像は、日本では現実になり得ないのだろうか。学校は、おいしさを演出する時空間環境としての「学び

の三つ星レストラン」になり得ないのだろうか。

もちろん、このような状態は、一方的に先生たちや学校に原因があるわけではない。家庭、地域、社会が、いまだ子どもたちの学びを、学校という時空間の中に丸投げして、任せっぱなしにしているという責任も大きい。「舌の肥えた学びの味わい手」が不在なのだ。

学社連携・融合の動きも徐々に成果を出しはじめている。「コミュニティ・スクールの実験校も始動した。本誌では、全国各地の開かれた学びの現場で、積極的に実践に取り組む方々からメッセージをいただいた。私たちも、実際にその場に足を運び、見聞してきたが、このような取り組みが、確実に理想と現実のギャップを埋めはじめている。

「春の祭典」のエネルギー

『ベルリン・フィルと子どもたち』という映画を観た。ベルリン・フィルと250人の難民を中心とした子どもたちが、ダンスの舞台上に挑んだ6週間のドキュメンタリー映画だ。厳しいトレーニングと励ましの中、クラシック音楽に興味のなかった子どもたちが、ストラヴィンスキーの『春の祭典』で、あの力強い曲の

勢いとともにエネルギーを爆発させる。見事な迫力だった。このような教育プロジェクトに、ベルリン・フィルが参加し、ドイツ銀行が支援する。すばらしい総合教育プロジェクトだ。学校の音楽室、体育館から外に出て、本物に出会った彼らは、彼らのポテンシャルのスイッチをONにした。外にある刺激で、心身全体のスイッチが入る。

このプロジェクトの発起人である、ベルリン・フィルの芸術監督兼首席指揮者のサー・サイモン・ラトルの公演後のひと言が心に残った。

「若者たちに教えてやりたい。人生はつねに何かに挑戦するものだ。じつと受け身でいるのではなく、行動すること。」

いつも、新しいものを探すこと。心をオープンにすれば、計画なんてなくてもいい。」

